日本福祉文化学会　関西ブロック　現場セミナー

「都会への人口集中による周辺地域の過疎化、限界集落の実態」

桃山学院大学大学院　社会学研究科　応用社会学専攻　篠原　剛志
田中　翔
築地　佑人

A.兵庫県丹波市

<実施日>　2012 年 3 月 19 日（月）～20 日（火）

<場所>　兵庫県丹波市神池寺地区、清住地区

<研修内容>

①　過疎集落神池寺地区の見学、定住促進会議山崎さんと高見自治会長の話

定住促進会議により、新しく丹波市神池寺地区の空き家に関西からの家族の入居が決定した。今回は新しく入居が決まった家で、元入居者の方も含め定住促進会議での話し合いの内容を中心に話をして頂いた。この話の中には、新しい入居者と地域との調整や、農業を始めるにあたっての土地の管理や進め方なども含まれていた。

②　丹波　曹洞宗達身寺見学

兵庫県丹波市氷上町清住にある曹洞宗達身寺の見学を行った。本尊は阿弥陀如来、開基は行基と伝えられている。ここでは、丹波市の歴史に触れるとともに、文化についての理解を深めた。今後、過疎地域の活性化に向け取り組む際の地域に根付いている文化や歴史的背景の重要性について考えるきっかけとなった。

また、清住地区の自治会が運営している宿舎で宿泊、シンポジウムをし、道の駅で昼食をとった。地産の米、野菜を使った食事を提供し、人気であった。

③　丹波市社会福祉協議会地域福祉担当者らとのシンポジウム

丹波市社会福祉協議会地域福祉担当者らが実際地域で行っている実践を中心に、丹波市の現状を含む、今後の課題などについて話して頂いた。この話をふまえ、今回のセミナー参加者が過疎地域に関する考えや質問を行い、話し合いをするシンポジウムとなった。

<まとめ>

兵庫県丹波市神池寺地区は、丹波市の中心地から離れた東地区にあり自然が豊かであり森や水などの資源が豊富である。丹波市全体の人口は 6 万 8 千人ほどだが 2004 年の町合併以後、減少傾向にある。また少子高齢化や都市化の影響もあり、保育所や小学校などが廃止・統合してきている。現在では氷上町や柏原町など、丹波市の中でも比較的都市化が進んでいる地域に人口が集中している。その理由として、交通手段や商店、また医療体制の充実などが考えられる。そのため、周辺地域にある神池寺地区や清住地区の過疎化はより一層進んでいる。

約 50 年前の神池寺地区では、農業や酪農が生活の中心であり、生まれてくる牛の性別

により、家族の QOL が大きく変化するほどであった。その当時は、地域での関係性も非常に良好で、地域として協力の体制が整っていた。しかし、環境の変化や近代化に伴い、人口の減少やコミュニティの希薄化が目立つようになってきた。それに伴い、各地域で行われる行事や農業が衰退していった。多くの人たちが雇用を求め、都市部への移住をした。交通の便が良いことや、比較的厳しい山間部ではないため外部からの移住の需要はあるが、家を売却せず残しておき、お盆などに帰省するなど、別荘化している家庭もある。現在では、高齢者の独居世帯が多く、若い世代が少ない状況になっている。地区の中に多くの空き家ができるようになった。

空き家は増える一方で、あまり有効活用されていないというのが現状である。そのため、丹波市神池寺地区では空き家を有効活用し、また地域活性化にもつながるとして「定住促進会議」を行っている。この会議では、外部からの移住者に対して、地域の情報提供や空き家の斡旋を行い、移住しやすい環境を整えるとともに、地域住民に対して移住者の理解を深めるためのアプローチを行っている。ただ移住者が来るだけでは地域活性化にはならないため、お互いの意見や気持ち、また生活に関することをマッチングさせることが重要であるという考えである。そのことで、移住者がより地域に馴染むことができ、地域コミュニティの一人として生活がおこないやすいのである。

しかし、農業をするよりも野菜や肉を安く買えてしまう現状や、近所付き合いの難しさが目立ってしまう。このような現状はあるが、地域のなかにこそ文化があるのではないだろうか。私たちは、都市を中心と考え過疎地域を見てしまうが、過疎地域の立場から考えていく必要がある。地域の中に残っている文化や都市化により希薄化しているコミュニティのあり方など、都市にはない多くのモノが過疎地域には残っている。実際に、数は減っているものの、自治会などはまた存続している。また、多くの自然や土地などの社会資源が存在し、これらを活用することでもっと地域の活性化を図る必要があるのである。現在は価値観の変化により、「子どもたちを安全・安心に育てたい。」「生きがいを感じたい。」として第二の人生を田舎で暮らしたいと考える人が増加している。また、都市部での生活ではなく、新しい生活として田舎暮らしを考える若者も増加している。

過疎地域を「生活のしにくい場所」で終わるのではなく、その地域に残る文化や資源に目を向け、多くの人に伝えることが重要である。また地域が協働し、資源を有効活用し多くの人たちに、地域の良さを理解してもらうことが大きな課題である。

B.三重県志摩市
日時　2012 年 3 月 31（土）～4 月 1 日（日）
場所　三重県志摩市和具長間崎島

研修内容
①　間崎島見学(空き家の現状、島唯一の酒屋、民宿)
②　浜辺全域の清掃活動
③　間崎島の方と運動会(玉入れ)や乙部自治会長の間崎島の歴史や産業背景などの話

三重県志摩市志摩町和具にある間崎島は英虞湾の中央部に浮かぶ島で、賢島から定期船で約１5 分である。周囲は 7.4ｋｍ、島民の多くが真珠養殖業や漁業を営んでいる。

間崎島の家屋は、どこもゆったりとしていて、島の奥深くまで大きな家が建っている。これは戦前、広大な自然から恵まれた海の真珠がたくさん得られたことが推測される。1970 年ごろまでは真珠づくりに使用されるいかだが、英虞湾を覆うように存在していた。1 戸当たりの電話の保有台数が日本 1 だと言われるほど豊かな島だったらしい。

ところが、真珠産業の衰退、町の合併、少子化などで、現在は人口は減少傾向にあり、1970 年ごろ 600 人いた住民は減少し、住民票は 120 人ほどの登録があるが、実際 100 人ほどしか住んでいないらしい。うち 85 人が高齢者である。つまり、高齢化率 85 パーセントの集落なのである。

その一方で子どもの数が減少し、125 年の歴史を持つ志摩市立和具小学校間崎分校（閉鎖時。以前は間崎小学校）が 2006 年 3 月に閉校になった。閉校時の生徒数は兄妹 2 名であった。その前に保育園も閉鎖され、現在も中学生になった兄妹二人だけが子どもと言える存在で、その上はこの兄妹の両親が 40 代半ばで存在しているだけである。

浜辺には 2000 年ごろに観光開発でしっかり整地されている個所もあり、夏には遊泳や釣りもでき観光地としても活用ができる。しかし、実際にはほとんど人が訪れることもない。島内にはよろず屋と酒屋があり、島の人に利用されている。しかしよろず屋の主人は 85 歳を超え、仕入れなども難しくなっている。病院やスーパーなどは鵜方や和具など船で移動しないと確保できず、1 か月に一度ボランティアで診察に来てくれる医師に頼っている。3 年前まであったデイサービスセンターも今では閉鎖されてしまった。夜間の介護を考えると、デイサービスセンターだけでは死までの介護が確保されないからである。

高齢化率 85 パーセントの離島では、島民が自分たちで島を再生させることは難しいとつくづく感じた。私たちの考えとして、これからの島の方々との関わりを深めていくことで、島外の若者を島の空き家などに受け入れを考えてくれるのではと感じた。自然の豊富なこの島でキャンプやレクリエーションをすることは理想的である。高齢者の生きがいを見出すためにも、若者を呼んでさまざまな行事を行うことは大切である。限界集落と考える前

に、人々の生きがいを大切にし、一つのコミュニティとしての枠組みを作ることが大切ではないかと感じた。

今後考えられる取り組みとして、次のようなアイデアが出てきた。

- 学生などを主体とした仕事の生きがいを考えるワークキャンプの取り組み
  島内の暮らしは高齢者だけでは成り立たない。例えば、浜掃除や道普請などは高齢者だけではない理立たないし、畑仕事もどんどんできなくなっていくだろう。若者たちがそういう仕事に協力することで、島の高齢者が島外の人を受け入れられるようになってくれればと思う。
- 高齢者が介護サービスを受けられるようなシステムづくり
  介護や医療のサービスが十分でないので、それらが日常的に必要になると、高齢者は島外の高齢者施設や子どもの所で暮らさざるを得ない。この島で最期を迎えられるようにすることで、安心して暮らすことができるようになる。
  これらのことは若者にもプラスになるに違いない。